

キジハタの栽培漁業事業化を目指して
～飼育実験によるキジハタ種苗の大量生産技術開発～

栽培・深層水課 主任研究員 町 敬介

1 背景・ねらい

キジハタは関西方面ではしゃぶしゃぶや姿蒸し等で食される高級魚である。本県では、キジハタ種苗の大量生産手法は確立しつつある。しかし、キジハタの栽培漁業を事業化には、種苗をより良質かつ効率的に生産できる技術開発が必要である。本発表では、これまでに実施した飼育実験の中から、①アルテミアの給餌開始時期と給餌量の検討、②鰾（うきぶくろ）の形成方法の探索、③椎体（背骨）異常の出現要因の検討について紹介する。

2 成果の概要

① アルテミアの給餌開始時期と給餌量の検討

飼育中期に給餌するアルテミアの最適な給餌時期と給餌量が分かることで、種苗の生産効率の向上や種苗生産にかかる餌代の削減が可能となる。本研究でアルテミアの給餌時期を変えた飼育実験を行った結果、16日齢（全長7.6mm）からアルテミアを給餌することで、最も生残率が高かった。また、キジハタ仔魚1尾あたりのアルテミア摂餌個体数は、全長10mmで平均35個体、全長15mmでは平均288個体であった（図1）。以上のことから、水槽内のキジハタ種苗の大きさ、尾数、注水の換水率等からアルテミアの適した給餌開始時期と給餌量が推定可能となった。

② 鰾の形成方法の探索

鰾は魚の浮力維持に必要であり、良質なキジハタ種苗の生産には、鰾の形成方法の開発が重要である。本研究で様々な飼育方法で鰾の形成状況を調査したところ、油膜除去スキーマーを使用し、海水を直接注水した場合で鰾の形成率が高かった（図2）。

③ 椎体異常の出現要因の検討

椎体異常は、種苗の成長に悪影響を与えるだけでなく（図3）、飼育年数を経るにつれて外見上の異常率が高くなる（図4）。本研究では、15日齢以降の餌を変えて試験を行ったところ、人工配合飼料を与えた区で椎体異常が多く出現した。以上から、椎体異常の要因の一つとして、人工配合飼料が胃内で膨満し、椎体を圧迫することで椎体異常を誘発することが考えられた。

3 成果の活用面・留意点

本研究で得られた結果は、キジハタの種苗生産時にかかるコストの削減や省力化に活用されることが期待される。

4 問い合わせ先

富山県農林水産総合技術センター水産研究所 栽培・深層水課
担当：町 敬介
TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ

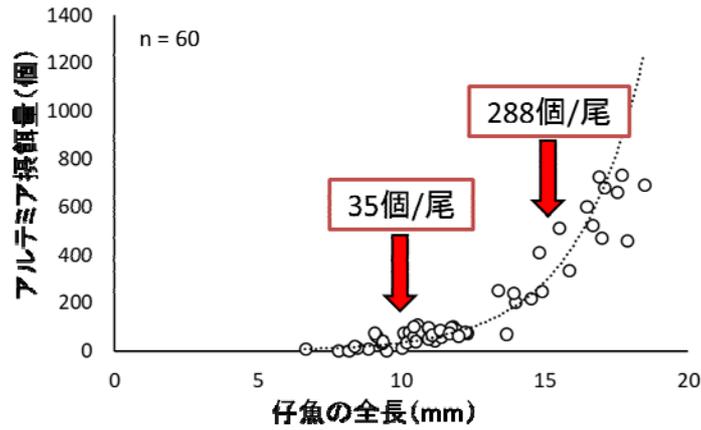


図1 キジハタ仔魚の全長とアルテミアの飽食摂餌量との関係

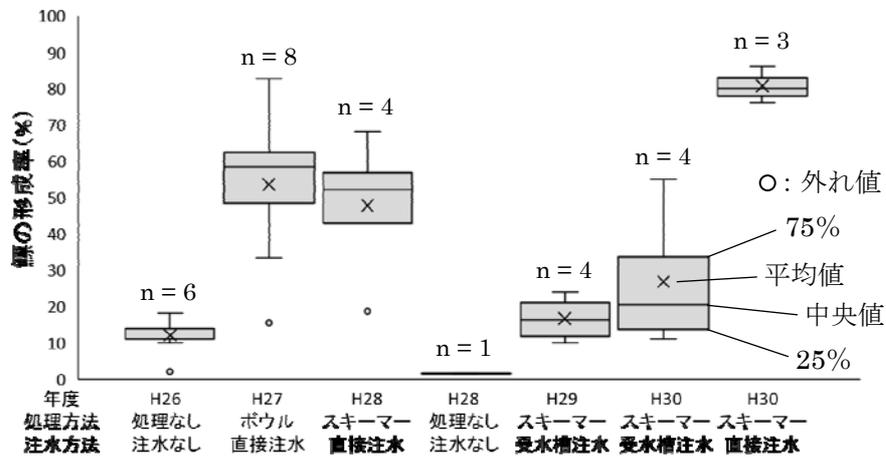


図2 飼育方法ごとの鱗の形成率

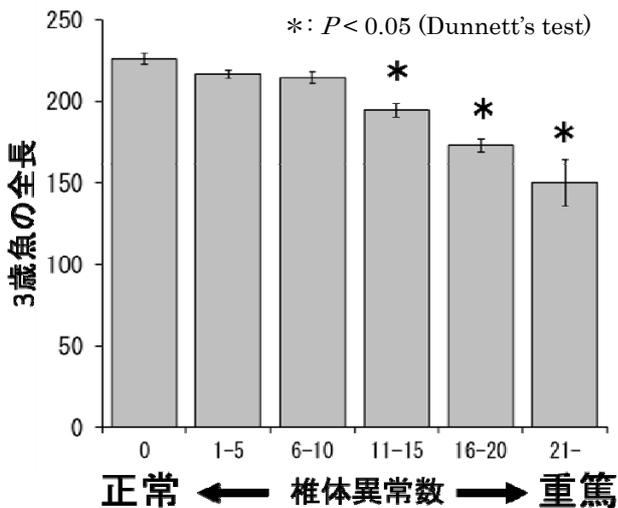


図3 キジハタ種苗(3歳)の椎体異常数と全長の関係

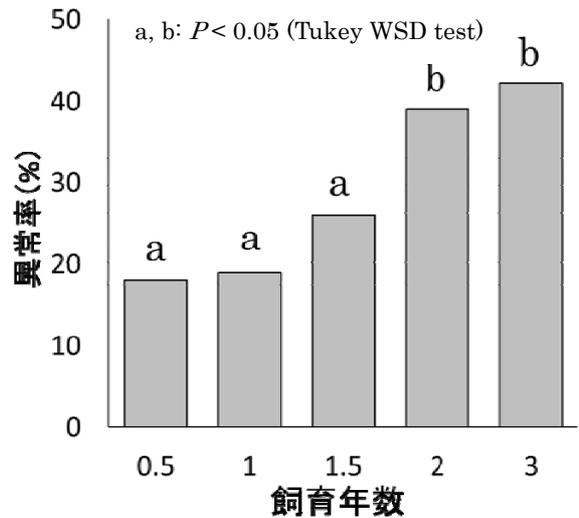


図4 キジハタ種苗の飼育年数と外見上の前彎症出現率の関係